

小・中・高・特 合同

平成 29 年度

教育研究員研究報告書

学校保健

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究構想図	2
III	研究仮説	3
IV	研究の視点	3
V	研究内容	
1	基礎研究	4
2	開発研究	6
3	調査研究	8
4	実践研究	13
	小学校	14
	知的障害特別支援学校(小学部)	17
	中学校	18
	高等学校	21
VI	研究のまとめ	22

研究主題

発達の段階に応じたがん教育 ～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた保健教育を通して～

I 研究主題設定の理由

生涯のうち、国民の二人に一人がかかると推測されるがんは、近年の重要な健康課題である。平成 24 年に国は「がん対策推進基本計画（第 2 期）」を策定した。これを受けて、文部科学省は平成 26 年度から平成 28 年度まで「がんの教育総合支援事業」を実施し、「がん教育」の在り方に関する検討会を設置するとともに、全国 21 か所の道府県・指定都市において「モデル事業」を行った。成果として、学校の教育活動全体の中でがん教育を推進することにより、がんに対する正しい理解とがん患者に対する正しい認識及び命の大切さに対する理解の深化がみられたことが挙げられている。これらを踏まえ、平成 29 年度以降にがん教育を全国展開することを目指し、平成 29 年 3 月に告示された中学校学習指導要領では、保健体育の内容としてがんについて取り扱うことが新たに明記された。

がん教育の実施に当たっては、「がんに関する科学的根拠に基づいた理解については、中学校・高等学校において取り扱うことが望ましい」¹と述べられている。一方で「健康や命の大切さの認識については、小学校を含むそれぞれの校種で発達の段階を踏まえた内容での指導が考えられる」とある。以上のことを踏まえて、本研究では小学校での取組を含めて中学校・高等学校を通じて系統性のある指導ができるように、発達の段階に応じた指導内容を検討したいと考えた。

また、学習指導要領改訂における具体的な改善事項として「保健については、健康に関心をもち、(中略)知識の指導に偏ることなく、三つの資質・能力をバランスよく育むことができる学習過程を工夫し、充実を図る」²ことが挙げられている。三つの資質・能力とは、「生きて働く知識・技能」、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等」、「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等」であり、これらを育むために「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている。本研究では、「学校におけるがん教育の在り方について」（「がん教育」の在り方に関する検討委員会 平成 27 年 3 月）で示されているがん教育の二つの目標「がんについて正しく理解することができるようにする」、「健康と命の大切さについて主体的に考えることができるようにする」を踏まえ、育てたい児童・生徒像を「がんについて正しく理解している」、「健康と命の大切さについて主体的に考えることができる」、「がん患者やその家族に対する理解を深め、共に生きる社会づくりを目指すことができる（中学校・高等学校）」とした。そして、これらの資質・能力を育むために、がん教育においても「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践を取り入れることが効果的であると考えた。

以上のことから、本研究では「発達の段階に応じたがん教育」を研究主題とし、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた保健教育を通して」を副主題に設定した。

¹ 「学校におけるがん教育の在り方について」（「がん教育」の在り方に関する検討会 平成 27 年 3 月）

² 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（中央教育審議会 平成 28 年 12 月 21 日）

Ⅱ 研究構想図

全体テーマ

平成 29 年度研究員共通テーマ

『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善

【現状と課題】

- ・社会環境や生活環境の変化に伴う新たな健康課題が顕在化している。
- ・がんは、生涯のうち国民の二人に一人がかかるとされる近年の重要な健康課題である。
- ・平成 24 年に策定された「がん対策推進基本計画（第 2 期）」を受け、文部科学省では平成 29 年度以降にがん教育の全国展開を目指すこととなった。

【育てたい児童・生徒像】

- (1) がんについて正しく理解している。
- (2) 健康と命の大切さについて主体的に考えることができる。
- (3) がん患者やその家族に対する理解を深め、共に生きる社会づくりを目指すことができる。(中・高)

研究主題

発達の段階に応じたがん教育

～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた保健教育を通して～

【研究仮説】

発達の段階に応じた指導内容・指導方法を工夫することによって、がんを正しく理解し、自他の健康と命の大切さについて主体的に考えることができる児童・生徒が育つだろう。

【研究方法】

基礎研究

- ・先行研究・文献等から、がんの現状や児童・生徒の意識を把握する。
- ・主体的・対話的で深い学びを実現する指導方法を検討する。

調査研究

質問紙調査により児童・生徒のがんに関する知識及び意識を把握するとともに、保健教育実施前後の児童・生徒の知識及び意識の変容について分析する。

開発研究

発達の段階に応じたがん教育の横断的・系統的モデルを作成する。

実践研究

- ・所属校の児童・生徒を対象とした保健教育を実施する。
- ・主体的・対話的で深い学びを実現する指導方法を工夫する。

【評価・検証方法】

保健教育実施前後に児童・生徒に質問紙を用いた調査を行い、知識・意識の変容を分析する。

授業中の発言やワークシート、児童・生徒の様子から、主体的・対話的で深い学びが実現できているかを分析・考察する。

Ⅲ 研究仮説

発達の段階に応じた指導内容・指導方法を工夫することによって、がんを正しく理解し、他の健康と命の大切さについて主体的に考えることができる児童・生徒が育つだろう。

Ⅳ 研究の視点

1 発達の段階に応じた系統的な指導

がん教育を推進するに当たっては、小・中・高等学校を通じて系統性のある指導が求められている。「外部講師を用いたがん教育ガイドライン」（文部科学省 平成28年4月）では、がん教育の進め方の基本方針として「発達段階を踏まえた指導を行う」と示されている。そこで、全校種の養護教諭で構成されている本部会の特性を生かし、実態に即したがん教育の系統的モデルを作成しようと考えた。小学校では病気の予防につながる生活習慣をはじめとした実践的な理解、中学校ではがんの疾病概念や予防等を含めた科学的な理解、高等学校においてはがん患者やその家族に対する理解や社会づくりへの参画など総合的な理解、そして特別支援学校では、児童・生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等を考慮し、よりよい生活習慣の定着を目指して、それぞれの校種における育てたい児童・生徒像を設定した。そして、発達の段階に応じて習得すべき知識や深めるべき思考過程を明確にした。

2 保健教育を中心とした横断的な指導

がんについて正しく理解することに加えて、がんに関する課題について適切な思考・判断を行い、自らの健康管理や健康的な生活行動の選択ができるようにするには、体育・保健体育の学習のみでは十分とは言えない。また、がんを扱うことを通じて、他の様々な疾病の予防や、望ましい生活習慣の確立等も含めた健康教育そのものの充実を図るべきであるという側面も考え合わせると、学校の教育活動全体を通じてがん教育をより適切に行うことが望まれる。そこで、体育科保健領域・保健体育科保健分野・保健体育科科目保健などの教科における学習と、学校行事や学級活動、ホームルーム活動に代表される特別活動等における学習を関連付けた横断的な指導計画を作成することとした。教科としての学習で基礎的・基本的な知識を習得し、さらに特別活動等の時間を活用して思考過程を重視した学習を展開することで、知識の定着を図り、自らの生活について興味・関心をもち、よりよい生活を送ろうとする態度を身に付けることができると考えた。

本研究における言葉の定義

【保健教育】

児童・生徒の健康の保持増進を図るために、学校において行われる体育・健康に関する指導のこと。指導時間として以下が挙げられる。

- ① 学習指導要領に基づき、主として体育、保健体育等の教科の中で行われる指導（小学校：体育科保健領域、中学校：保健体育科保健分野、高等学校：保健体育科科目保健、及び関連教科における保健に関する学習）
- ② 特別活動（学級活動・ホームルーム活動、児童・生徒会活動、学校行事）における保健指導、保健室での指導、日常生活での指導

V 研究内容

1 基礎研究

(1) がん教育の現状

がん教育の教育的価値については、「健康に関する国民の基礎的教養として身に付けておくべきものとなりつつあるがんについて、児童・生徒が正しく理解することや、がんを通して自他の健康と命の大切さについて学ぶことは、大変意義のあること」³とされている。

平成 28 年度がんの教育総合支援事業成果報告会において発表された、がんの教育総合支援事業評価アンケートで特に望ましい変容が見られた項目は、図 1 に示すとおりである。がんについての学習を通して、児童・生徒が自らの生活を振り返ったり、家族の健康を守るための行動に気付いたりする機会となった状況がうかがえる。しかし、図 2 に示す項目においては課題も見られ、知識が確実に定着しているとは言えず、必ずしも健康を保持増進していくための実践的な行動に結び付いていない現状が明らかとなった。さらに、がん教育を実施する上での課題として、「発達段階を踏まえた科学的根拠に基づく指導の推進、外部講師の確保や研修会のあり方、教育効果を確認するための評価のあり方、教育課程上の位置づけ」⁴について指摘されている。これらの課題に対し、発達の段階に応じたがん教育を行うためには、がん教育の横断性や系統性を意識した指導が必要であると考えた。また、がんに関する正しい知識の習得・定着を図るためには、学習活動を工夫することが課題であると考え、先行研究・文献等から、発達の段階に応じたがん教育の在り方を検討した。

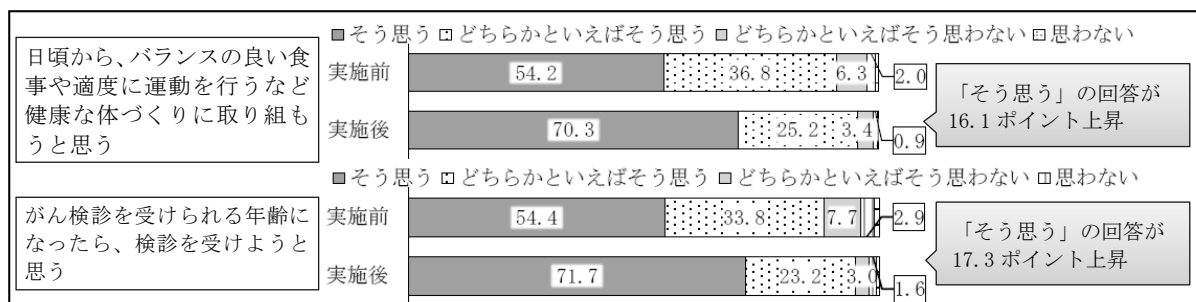


図 1 がんの教育総合支援事業評価アンケートで特に望ましい変容が見られた項目（単位：%）

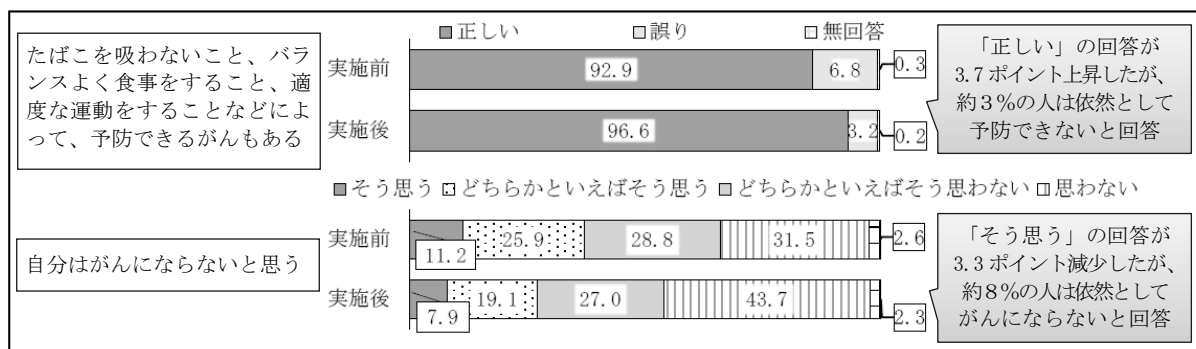


図 2 がんの教育総合支援事業評価アンケートで課題とされる項目（単位：%）

³ 「平成 28 年度がんの教育総合支援事業成果報告会」（文部科学省 平成 28 年 11 月）

⁴ 「学校におけるがん教育の在り方について報告」（「がん教育」の在り方に関する検討会 平成 27 年 3 月）

(2) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

平成 29 年 3 月に告示された新学習指導要領では、児童・生徒が学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにすること、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であることから、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善(アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善)を推進することが求められている。

まず、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める際の六つの留意点を整理し、実践研究を行う際の基本指針とした。⁵

- ア 児童生徒に求められる資質・能力を育成することを目指す授業改善の取組は、既に小・中学校を中心に多くの実践が積み重ねられており、特に義務教育段階はこれまで地道に取り組まれ蓄積されてきた実践を否定し、全く異なる指導方法を導入しなければならないと捉える必要はないこと
- イ 授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく、児童生徒に目指す資質・能力を育むために「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で授業改善を進めるものであること
- ウ 各教科等において通常行われている学習活動（言語活動、観察・実験、問題解決的な学習など）の質を向上させることを主眼とするものであること
- エ 1 回 1 回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教員が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること
- オ 深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような視点で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において、「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることこそ、教師の専門性が発揮されることが求められること
- カ 基礎的・基本的な知識及び技能の習得に課題がある場合には、その着実な習得を図ることを重視すること

また、本研究の実践研究に関わる各教科等の主体的・対話的で深い学びの視点について表 1 のように整理した。なお、授業実践で特に参考にした事項は、ゴシック体で表記した。

表 1 新学習指導要領に基づく主体的・対話的で深い学び

	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
【小学校】 体育 (保健領域) 【中学校】 保健体育 (保健分野)	健康の意義等を見付け、健康についての興味や関心を高め、課題の解決に向けて粘り強く自ら取り組み、それを考察するとともに学習を振り返り、課題を修正したり新たな課題を設定したりするなどの主体的な学びを促すこと	健康についての課題の解決に向けて、児童・生徒が他者（書物等を含む）との対話を通して、自己の思考を広げたり深めたりし、課題の解決を目指して、協働的な学習に取り組むなどの対話的な学びを促すこと	学びの過程を通して、自己〔他〕の健康についての課題を見付け、解決に向けて試行錯誤を重ねながら、思考を深め、より良く解決するなどの深い学びを促すこと ※ [] 内は中学校のみの表現
特別活動	学ぶことに興味・関心をもち、学校生活に起因する諸課題の改善・解決やキャリア形成の方向性と自己との関連を明確にしながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の活動を振り返りながら改善・解消に励むなど、活動の意義を理解した取組	児童・生徒相互の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方や資料等を手掛かりに考えたり話し合ったりすることを通して、自己の考え方を協働的に広げ深めていくこと	学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、新たな課題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることで、学んだことを深めること

⁵ 「小学校、中学校学習指導要領解説 総則編、体育編、保健体育編、特別活動編」（文部科学省 平成 29 年 6・7 月）

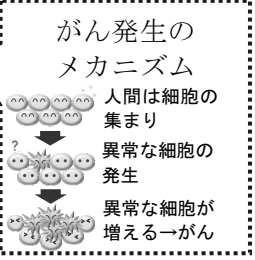
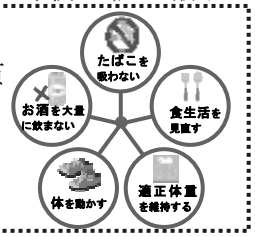
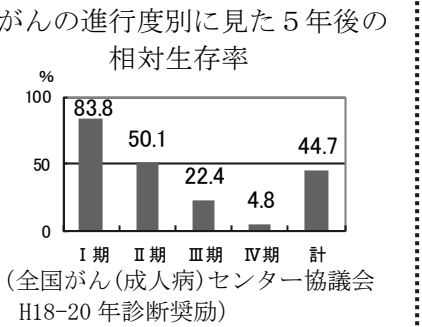
2 開発研究

がん教育は健康教育の一環であるため、児童・生徒の発達の段階を考慮し、学校の教育活動全体を通じて適切に行う必要がある。そこで、「発達の段階に応じたがん教育の横断的・系統的モデル」を作成し、がん教育の教育課程上の位置付けを明らかにした上、指導内容をまとめた。

発達の段階に応じたがん教育の

「体育・保健体育」、「生活単元学習」を中心に知識習得 → 「特別活動」を中心に

【がんの知識】より科学的・総合的な内容へ学びを深めていく。
【健康と命の大切さ】自らの健康だけでなく、共に生きる社会づくりについても視野を広げていく。

教 育 学 校 種 別	体育（保健領域）・保健体育（保健分野）・保健体育（科目保健）
小学校	《<u>現行</u> 体育第6学年G保健(3)病気の予防ウ》 《<u>新</u> 体育第6学年G保健(3)病気の予防アイ》 【がんに関する基礎的な知識】P.14 参照 ・がん発生のメカニズム、がんの罹患率、がんと抵抗力の関係、がんと喫煙・飲酒・生活習慣の関係について学ぶ。 ・がんを予防するための生活習慣について考える。 
知特(小)	《<u>新</u> 体育G保健》 保健は、生活科「2各段階」に示す内容の「A」基本的な生活習慣や「B」安全などとの関連を積極的に図り、指導の効果を高められるようにする。
知特(中)	《<u>現行</u> 保健体育(3)発育・発達への関心や健康・安全の初歩的な事柄》 《<u>新</u> 保健体育H保健ア病気の予防イ自分の健康・安全についての課題を見付ける》
中学校	《<u>現行</u> 保健体育保健分野第3学年(4)健康な生活と疾病の予防イウカ》 《<u>新</u> 保健体育保健分野第2学年(1)健康な生活と疾病の予防アウカの予防イ》 【がんに関する科学的な知識】P.18 参照 ・がんの原因やがんを予防する望ましい5つの生活習慣、がんの早期発見とがん検診の大切さについて学ぶ。 ・がんを予防するための生活習慣について考える。 
高等学校	《<u>現行</u> 保健体育保健(1)現代社会と健康イ (2)生涯を通じる健康イウ》 【がんの総合的な知識】 ・がんという病気を理解する。 ・がんの原因や予防策、早期発見、がん検診の大切さについて学ぶ。 ・がんを予防するための生活習慣について考える。 

※知特(小)…知的障害特別支援学校(小学部)、知特(中)…知的障害特別支援学校(中学部)

※…東京都教育委員会発行のがん教育のリーフレット参照事項

【育てたい児童・生徒像】

- (1) がんについて正しく理解している。
- (2) 健康と命の大切さについて主体的に考えることができる。
- (3) がん患者やその家族に対する理解を深め、共に生きる社会づくりを目指すことができる。(中・高)

※倫理的配慮については、P. 13 参照。

横断的・系統的モデル

健康と命の大切さについて考える

※各校の実態に応じて総合的に実施

学校行事 学級活動・ホームルーム活動	その他の教科等 ☆…先行研究で実践事例あり
《現行》新学校行事(3)健康安全・体育的行事》 《現行》新学級活動(2)健康安全》 【健康と命の大切さ】P. 15 参照 ・学習内容の振り返りをする。 ・がん経験者の手記または体験談を聞いて、自他の健康や自分の現在の生活について考える。 がんを経験した人の気持ちを考える 	生活 理科 家庭 道徳☆ 総合的な学習の時間 児童会活動 学校保健委員会
《現行》新学校行事・学級活動 小学校に準ずる》  【生活単元学習】「元気に過ごせる食事を知ろう」P. 17 参照 児童の生活に身近な給食を教材にすることで、栄養バランスのよい食事をする習慣を身に付ける。 ※生活単元学習では、広範囲に各教科等の内容が扱われる。	生活単元学習
《現行》新学校行事・学級活動 中学校に準ずる》 《現行》新学校行事(3)健康安全・体育的行事》 《現行》新学級活動(2)健康安全》 【健康と命の大切さ】P. 19 参照 ・学習内容の振り返りをし、がんの治療方法について学ぶ。 ・がん経験者の手記または体験談を聞いて、共に生きる社会づくりについて話し合い、自分にできることを考える。 がん患者や周囲の人と共に生きる 	生活単元学習 職業・家庭（家庭分野） 理科 家庭 道徳☆ 総合的な学習の時間 生徒会活動 学校保健委員会☆
《現行》新学校行事(3)健康安全・体育的行事》 《現行》新ホームルーム活動(2)健康安全》 【健康と命の大切さ】P. 21 参照 ・知り得た知識を基に自分の考えを構築し、家族や友人などと対話する中で、課題を見付け、共に解決策を考える。 ・社会の一員として自分にできることを総合的に判断し、実践する。 誰もが暮らしやすい社会を目指して  自分にできることを考える 今後に向けて 	理科（生物） 家庭 公民（倫理） 総合的な学習の時間☆ 生徒会活動☆ 学校保健委員会 ※その他各校で設置された教科等

※《》…現行学習指導要領 平成 20 年 3 月・平成 21 年 3 月告示、新学習指導要領 平成 29 年 3 月告示
※☆の先行研究は、「平成 28 年度がんの教育総合支援事業成果報告会」（文部科学省平成 28 年 8 月）参照

3 調査研究

(1) 調査の目的

- ア 児童・生徒のがんに関する知識及び意識の実態を把握する。
- イ がんに関する保健教育の実践を通して、児童・生徒の知識及び意識がどのように変容したのかを分析・考察する。

(2) 調査の実施状況

ア 調査期間 平成 29 年 9 月～11 月

イ 調査対象

実態調査においては、研究員所属校(知的障害特別支援学校を除く)における該当学年の児童・生徒を対象とした(表 2)。保健教育検証調査では、調査期間中に保健教育を実施できた学校の児童・生徒を対象とした。

表 2 調査対象数

	調査対象 総計	小学校 第6学年	中学校 第3学年	高等学校 第1学年
実態調査	1436 名 (13 校)	453 名 (8 校)	235 名 (2 校)	748 名 (3 校)
保健教育 検証調査	728 名 (7 校)	304 名 (5 校)	93 名 (1 校)	331 名 (1 校)

ウ 調査方法

無記名で選択肢から回答する質問紙調査を行った。知識については 2 件法⁶で、意識については 4 件法⁷で調査した。

エ 調査内容

知識については、校種ごとに「がんについて正しく理解し、健康と命の大切さを考えるリーフレット」(東京都教育委員会 平成 29 年 6 月)を参考に質問項目を作成した(表 5・6・7 参照)。意識については、「平成 28 年度がんの教育総合支援事業成果報告会」(文部科学省 平成 28 年 11 月)に掲載されているアンケートを参考に作成した(P11 表 8 参照)。

オ 調査に当たっての留意点

身近な人のがん経験者がいる児童・生徒等に配慮し、調査前に保護者のがんについて調査することを知らせるとともに、児童・生徒には調査当日にがんについて考えることが辛ければ、無理に回答しなくてもよい旨を伝えた。

(3) 調査の結果とまとめ

ア 実態調査の結果

実態調査における有効回答数は表 3 のとおりである。

表 3 実態調査の有効回答数(有効回答率)

総計	小学校 第 6 学年	中学校 第 3 学年	高等学校 第 1 学年
1208 名 (84.1%)	436 名 (96.2%)	205 名 (87.6%)	567 名 (75.8%)

(ア) がんの学習経験について

がんについて聞いたり学習したりしたことがあると回答した児童・生徒は、全体で 76.8%であった(表 4)。がんの学習経験が「ある」と回答した児童・生徒については、情報源も調査した(複数回答)。情報源は「テレビ」が最多であった(図 3)。

表 4 がんの学習経験について

がんの 学習経験	小学校	中学校	高等学校
ある	363 名 (83.3%)	160 名 (78.0%)	405 名 (71.4%)
ない	73 名 (16.7%)	45 名 (22.0%)	162 名 (28.6%)

⁶ 「正しい」、「誤り」の 2 段階尺度から 1 項目を選択させた。

⁷ 「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」、「思わない」の 4 段階尺度から 1 項目を選択させた。

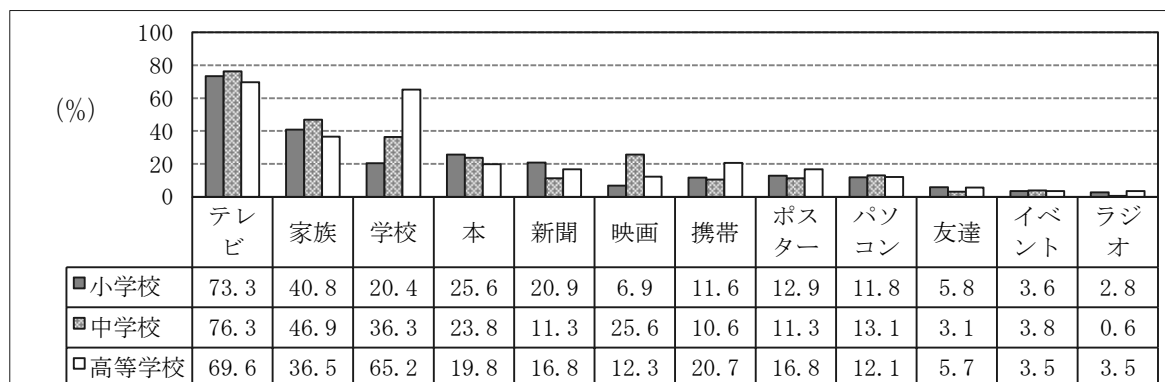


図3 がんを学習した情報源

(イ) がんに関する知識について

がんに関する知識については、1問当たり1点として【知識正答数】とした。全て正答の場合、小学校では6点、中学校11点、高等学校14点である。「がんの学習経験」及び「情報源」と【知識正答数】については、全ての校種において相関が見られなかった。

a 小学校

小学校におけるがんに関する知識は、表5のとおりであった。最も正答率が高かったのは問6、最も正答率が低かったのは問3であった。平均【知識正答数】は4.7点であった。

表5 がんに関する知識について(小学校)

(n=436)

問	質問項目	正答	正答率(%)	知識正答数(正答率)
1	がんは異常な細胞が増えていく病気である。	正	81.0	平均 4.7点 (77.9%) 標準偏差 1.0
2	一生の間に、日本人の約2人に1人が、何らかのがんにかかるといわれている。	正	64.7	
3	健康的な生活習慣を心がけても、がんになる危険性は変わらない。	誤	59.9	
4	細菌やウイルスの感染が原因となるがんや、まだ原因が分からないがんもある。	正	77.5	
5	がんは、早く発見して適切な治療をすれば、健康な生活に戻ることができる。	正	89.0	
6	体の調子が良い場合は、定期的に検診を受けなくてもよい。	誤	95.4	

b 中学校

中学校のがんに関する知識は表6のとおりであった。最も正答率が高かったのは問5、最も正答率が低かったのは問2であった。平均【知識正答数】は8.4点であった。

表6 がんに関する知識について(中学校)

(n=205)

問	質問項目	正答	正答率(%)	知識正答数(正答率)
1	がんは体の中で異常な細胞が増殖していく病気である。	正	89.3	平均 8.4点 (76.0%) 標準偏差 1.6
2	がんは日本人の死因の第2位である	誤	46.8	
3	日本人の2人に1人は一生のうちに何らかのがんにかかると言われている。	正	64.9	
4	がんにかかる原因は「生活習慣、体質(遺伝要因)」のみである。	誤	77.1	
5	たばこの煙は、肺がんの他にも多くのがんにかかる危険性を高める。	正	93.7	
6	お酒を大量に飲むと、発がん物質が体内に取り込まれやすくなる。	正	88.8	
7	塩分の多い食べ物をたくさんとることは、胃がんを予防する。	誤	87.8	
8	肥満ややせ過ぎは、がんの原因になることがある。	正	74.1	
9	適度な運動をしていても、がんの予防は期待できない。	誤	71.2	

10	自覚症状が出るまでに見付けた初期のがんの約9割は治すことができる。	正	80.0	
11	がん治療の柱は、「手術療法」「化学療法」の二つだけである。	誤	62.0	

c 高等学校

高等学校のがんに関する知識は表7のとおりであった。最も正答率が高かったのは問8、最も正答率が低かったのは問4であった。平均【知識正答数】は10.4点であった。

表7 がんに関する知識(高等学校)

(n=567)

問	質問項目	正答	正答率(%)	知識正答数(正答率)
1	がんは体内の正常な細胞の遺伝子に傷が付き、異常な細胞が増殖していく病気である。	正	79.7	平均 10.4点 (74.1%) 標準偏差 1.6
2	加齢に伴い、がんにかかる危険性は高まるが、子供がかかるがんもある。	正	96.1	
3	日本では近年、約3人に1人ががんが原因で死亡している。	正	75.5	
4	日本人の約5人に1人は一生のうちに何らかのがんにかかるとう推計されている。	誤	24.0	
5	東京都においては、がんによる死亡者数は年々減少している。	誤	61.6	
6	がんは、全ての臓器に発生する可能性があり、その種類や状態によってそれぞれ特徴がある。また、生活上の支障なども、症状や状況により異なってくる。	正	91.7	
7	がんの原因は、喫煙・飲酒・運動不足などの生活習慣、細菌・ウイルス感染などの他、遺伝要因が関与するものや原因が分かっていないものもある。	正	93.1	
8	がん予防の工夫として、たばこを吸わない、食生活を見直す、大量の飲酒を避ける、適正体重の維持や運動、定期的に健康診断を受けることなどが挙げられる。	正	97.0	
9	多くのがんは早期に発見すれば、約9割が治る可能性がある。	正	77.2	
10	がんは症状がないまま進行するため、検診を定期的に受けることが不可欠である。日本では、肺がん、胃がん、乳がん、子宮頸がん、大腸がんなどの検診が行われている。	正	89.1	
11	がんの治療の柱は、手術療法・放射線療法・抗がん剤などの化学療法であり、がんの種類と進行度に応じて、これらの治療法を単独のみで行うことが推奨されている。	誤	43.7	
12	がんの治療では、患者が医師から十分な説明を受け、理解した上で治療法を選択するインフォームド・コンセントが重要である。	正	93.7	
13	治療方針について、主治医以外の別の医師に意見を求めるファースト・オピニオンを利用することができる。	誤	25.9	
14	緩和ケアとは、がんになったことで起こりうる痛みや心のつらさなどを和らげるための支援で、通常の生活への支援や、治らない場合の心身の苦痛を取るための医療である。	正	89.4	

(ウ) がんに関する意識について

質問項目は表8のとおりである。小学校における調査では、本研究における育てたい児童像に照らして、設問を問1～7までの7問とした。「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「思わない」の4件法で調査し、「そう思う」から降順に点数化し、合計得点を【意識得点】とした(問2・9は逆転項目)【意識得点】の最大値は、小学校が28点、中学校・高等学校が44点であり、平均点及び、標準偏差は表9のとおりである。全ての校種において【知識正答数】と【意識得点】の相関は見られなかった。

表 8 がんに関する意識についての質問項目

問	質問項目
1	がんの学習は、健康な生活を送るために役に立つ。
2	自分はがんにならないと思う。
3	将来、たばこを吸わないでいようと思う。
4	日頃から、バランスのよい食事や適度に運動を行うなど健康な体づくりに取り組もうと思う。
5	がんになっても、いきいきと日常生活を送ることはできる。
6	がんと健康について、まずは身近な家族と話し合おうと思う。
7	長生きするために、健康な体づくりに取り組もうと思う。
8	がん検診を受けられる年齢になったら、検診を受けようと思う。
9	がんの治療法はいくつかあるが、医師が決めるものだと思う。
10	がん患者やその家族も含めて、誰もが暮らしやすい社会にすることができると思う。
11	家族や身近な人が健康でいるために、がん検診を受けるように勧めたいと思う。

がんに関する意識についての集計結果

は表 10 のとおりである。「そう思う」と回答した児童・生徒が少なかったのは、問 5・6・10 であった。また問 2・9 に関しても「思わない」と回答した児童・生徒は約 20%程度であった。

表 9 意識得点の平均・標準偏差

意識得点	小 学 校	中 学 校	高等学校
最大値	28	44	44
平均	22.6	34.4	35.3
標準偏差	2.6	4.1	4.4

表 10 がんに関する意識の集計結果

(小学校=小、中学校=中、高等学校=高) (小 n=436 中 n=205 高 n=567 計 n=1208) (%)

問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
そう思う	小	70.2	14.4	90.6	56.9	14.4	30.3	73.6			
	中	63.9	9.8	90.2	40.5	12.7	25.9	56.6	62.4	23.9	26.8
	高	66.8	23.8	82.0	51.5	33.7	36.3	59.3	56.6	12.5	37.9
	計	67.0	16.0	87.6	49.6	20.3	30.8	63.2	59.5	18.2	32.4
どちらかといえ ばそう思う	小	25.2	29.6	6.0	37.4	24.8	45.0	21.8			
	中	31.2	23.9	7.3	47.3	22.4	43.4	36.6	29.3	30.2	43.4
	高	30.3	38.6	12.3	39.5	38.1	38.6	32.3	33.7	31.0	42.0
	計	28.9	30.7	8.5	41.4	28.4	42.3	30.2	31.5	30.6	42.7
どちらかといえ ばそう思わ ない	小	3.0	36.2	2.1	3.9	37.6	16.7	2.5			
	中	3.4	32.2	1.5	10.7	38.0	21.5	5.9	5.4	25.9	23.4
	高	1.8	24.7	3.0	7.1	19.6	16.9	6.0	8.1	34.6	14.8
	計	2.7	31.0	2.2	7.2	31.7	18.4	4.8	6.7	30.2	19.1
思わない	小	1.6	19.7	1.4	1.8	23.2	8.0	2.1			
	中	1.5	34.1	1.0	1.5	26.8	9.3	1.0	2.9	20.0	6.3
	高	1.1	12.9	2.6	1.9	8.6	8.1	2.5	1.6	21.9	5.3
	計	1.4	22.2	1.7	1.7	19.5	8.5	1.8	2.3	20.9	5.8

(エ) 実態調査から分かったこと

どの校種でも、がんに関する情報源としてテレビを挙げる児童・生徒が最も多かったが、必ずしも正しい知識の定着には結び付いていないことが分かった。がんに関する知識では、校種が上がるにつれ、生活習慣とがんの関係について正答率が高まった。しかし、日本人の死因に占めるがんの割合や罹患率など、がんの現状についての理解は十分ではない。また、がんに関する意識では、「自分はがんにならないと思う」に対し、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答する児童・生徒が約半数いた。また、がん患者の生活の質や共生社会の実現については、肯定的な意識が低いことが分かった。

イ がんに関する保健教育実施前後の効果検証

がんに関する保健教育実施前を事前、実施後を事後とし、保健教育の効果検証を行った。事前調査には前述の実態調査を充て、事後調査は実態調査と同様の質問項目を用いて、保健教育実施後に調査した。有効回答数は表 11 のとおりである。

(ア) がんに関する知識の変化

【知識正答数】について事前と事後で平均値に明らかな差があるか t 検定⁸を実施した(表 12)。全校種において事後の【知識正答数】が有意に高まった。事前調査で最も正答率が低かった問について事前、事後で正答率の変容を見た(図 4)。小学校は問 3「生活習慣とがんの関係について」で 18 ポイント、中学校は問 2「日本人の死因に占めるがんの割合」で 29.5 ポイント、高等学校では問 4「がんの罹患率」問で 50.8 ポイント上昇した。

(イ) がんに関する意識の変化

知識と同様に、【意識得点】について事前と事後で t 検定を行った(表 13)。全校種において事後の【意識得点】が有意に高まった。また意識の各質問項目について、実態調査と同じように点数化し、事前と事後で平均値に明らかな差があるか t 検定を行った(表 14)。

表 11 保健教育検証調査の有効回答(有効回答率)

総計	小学校 第6学年	中学校 第3学年	高等学校 第1学年
609 名 (83.7%)	283 名 (93.1%)	78 名 (83.9%)	248 名 (74.9%)

表 12 知識正答数の比較 **有意に高まった項目($p \leq 0.01$)

	事前		事後	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
小 (n=283)	4.7	1.0	5.4**	0.7
中 (n=78)	8.1	1.5	9.9**	1.1
高 (n=248)	10.8	1.3	12.2**	1.3

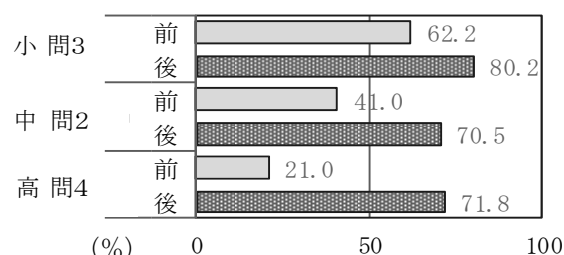


図 4 事前・事後の正答率の比較

表 13 意識得点の比較

	事前		事後	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
小 (n=283)	23.0	2.5	23.6**	2.4
中 (n=78)	34.3	3.5	36.2**	3.5
高 (n=248)	36.3	4.1	37.3**	3.9

表 14 事前・事後での意識項目の平均値の変容について有意に高まった項目 (小 n=283、中 n=78、高 n=248) ** ($p \leq 0.01$) * ($p \leq 0.05$)

増減とは「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と肯定的な回答をした児童・生徒の割合である。

*問 2・9 に関しては「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」と回答した児童・生徒とした。

小学校	問	1	2	3	4	5	6	7				
	前	3.7	2.6	3.9	3.6	2.3	3.1	3.7				
	後	3.8**	2.7	3.8	3.7**	2.4	3.3**	3.8				
中学校	問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	前	3.5	2.9	3.9	3.3	2.3	2.8	3.5	3.4	2.3	3.0	3.3
	後	3.8**	2.9	3.9	3.5	2.5	3.1**	3.6**	3.6	2.7**	3.1	3.4
高等学校	問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	前	3.7	2.7	3.9	3.5	3.1	3.1	3.6	3.6	2.5	3.2	3.5
	後	3.8**	2.9**	3.9	3.6	3.3**	3.1	3.6*	3.7**	2.5	3.3**	3.6
小学校	問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	前	3.7	2.7	3.9	3.5	3.1	3.1	3.6	3.6	2.5	3.2	3.5
	後	3.8**	2.9**	3.9	3.6	3.3**	3.1	3.6*	3.7**	2.5	3.3**	3.6
中学校	問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	前	3.7	2.7	3.9	3.5	3.1	3.1	3.6	3.6	2.5	3.2	3.5
	後	3.8**	2.9**	3.9	3.6	3.3**	3.1	3.6*	3.7**	2.5	3.3**	3.6
高等学校	問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	前	3.7	2.7	3.9	3.5	3.1	3.1	3.6	3.6	2.5	3.2	3.5
	後	3.8**	2.9**	3.9	3.6	3.3**	3.1	3.6*	3.7**	2.5	3.3**	3.6
小学校	問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	前	3.7	2.7	3.9	3.5	3.1	3.1	3.6	3.6	2.5	3.2	3.5
	後	3.8**	2.9**	3.9	3.6	3.3**	3.1	3.6*	3.7**	2.5	3.3**	3.6
中学校	問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	前	3.7	2.7	3.9	3.5	3.1	3.1	3.6	3.6	2.5	3.2	3.5
	後	3.8**	2.9**	3.9	3.6	3.3**	3.1	3.6*	3.7**	2.5	3.3**	3.6
高等学校	問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	前	3.7	2.7	3.9	3.5	3.1	3.1	3.6	3.6	2.5	3.2	3.5
	後	3.8**	2.9**	3.9	3.6	3.3**	3.1	3.6*	3.7**	2.5	3.3**	3.6
小学校	問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	前	3.7	2.7	3.9	3.5	3.1	3.1	3.6	3.6	2.5	3.2	3.5
	後	3.8**	2.9**	3.9	3.6	3.3**	3.1	3.6*	3.7**	2.5	3.3**	3.6
中学校	問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	前	3.7	2.7	3.9	3.5	3.1	3.1	3.6	3.6	2.5	3.2	3.5
	後	3.8**	2.9**	3.9	3.6	3.3**	3.1	3.6*	3.7**	2.5	3.3**	3.6
高等学校	問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	前	3.7	2.7	3.9	3.5	3.1	3.1	3.6	3.6	2.5	3.2	3.5
	後	3.8**	2.9**	3.9	3.6	3.3**	3.1	3.6*	3.7**	2.5	3.3**	3.6
小学校	問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	前	3.7	2.7	3.9	3.5	3.1	3.1	3.6	3.6	2.5	3.2	3.5
	後	3.8**	2.9**	3.9	3.6	3.3**	3.1	3.6*	3.7**	2.5	3.3**	3.6
中学校	問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	前	3.7	2.7	3.9	3.5	3.1	3.1	3.6	3.6	2.5	3.2	3.5
	後	3.8**	2.9**	3.9	3.6	3.3**	3.1	3.6*	3.7**	2.5	3.3**	3.6
高等学校	問	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
	前	3.7	2.7	3.9	3.5	3.1	3.1	3.6	3.6	2.5	3.2	3.5
	後	3.8**	2.9**	3.9	3.6	3.3**	3.1	3.6*	3.7**	2.5	3.3**	3.6

⁸ 対応のある 1 つの母集団が正規分布に従うと仮定した上で、平均が等しいかどうかを判定し、平均値に有意な差があるかをみる。

表 14 より、問 1「がんの学習は役に立つ」については、全ての校種において平均値が有意に高まった。

問 6「がんと健康について身近な家族と話し合う」について、小・中学校では平均値が有意に高まった。「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と肯定的な回答をした児童・生徒は、小学校では 16.6 ポイント、中学校では 9.0 ポイント増加した。

問 5「がん患者の生活の質の捉え方」について高等学校では平均値が有意に高まり、肯定的な回答をした生徒が 9.7 ポイント増加した。しかし、小・中学校では有意に高まったと言えず、平均値は小学校が 2.4 点、中学校が 2.5 点にとどまった。

問 10「がん患者との共生社会の実現」について中学校では平均値が 3.1 にとどまり、有意に平均値が高まったとは言えなかった。高等学校では、肯定的な回答が 6.9 ポイント増加し、平均値が 3.3 点となり、平均値が有意に高まった。問 2・9 については事前・事後ともに回答にばらつきが見られた。

(ウ) 事前事後比較による効果検証から分かったこと

がんに関する保健教育を実施した後は、全ての校種でがんに関する知識が有意に高まったことが分かった。がんに関する意識については、全ての校種でがん教育の必要性について意識が高まった。しかし、実態調査で肯定的な回答が低かったがん患者の生活の質の捉え方や共生社会の実現については、小・中学校においては今回の保健教育実施によって変容につなげることができなかった。

4 実践研究

(1) がん教育を実施するに当たって（小・中・高・特別支援学校共通事項）

ア 身近にがん患者がいる児童・生徒、または小児がん、小児がんにかかったことがある当事者がいる場合に以下のような倫理的配慮を行う。

(ア) がん教育を実施する前に、紙面または保護者会などでがんについて学習活動を行う旨を事前に家庭に周知する。

(イ) 配慮が必要な児童・生徒を事前に確認し、授業中の対応について本人に希望を聞いておく。

(ウ) 授業の始めに、辛いときはいつでも申し出るよう伝え、必要時には職員室や別室で個別に対応する。

(エ) 児童・生徒本人、家庭環境などを鑑み、がん教育を受容できる時期まで実施を見合わせる。

(オ) 本人に限定されるような内容に特化しないように、事例を一般化するなどの工夫する。

イ がんについて正しく理解し、健康と命の大切さを考えるリーフレットの活用

(ア) 東京都教育委員会から発行されたがん教育のリーフレットを学習活動に活用する。

(イ) リーフレットをがん教育の実施後に児童・生徒に配布し、各家庭でもがんについて話し合う機会をつくるよう促す

ウ 主体的・対話的で深い学びの実現を図るための考え方

(ア) 児童・生徒の姿が、主体的・対話的で深い学びになっているか。また、その姿につながるように、指導の工夫を考える。

(イ) 単元や題材など内容や時間のまとまりを通して、主体的・対話的で深い学びの実現を図ることができるよう、単元（題材）の指導計画を立てる。

(2) がん教育の実践事例

ア 小学校 第6学年

【目標】がんという病気の概要や病気の予防について学ぶことを通して、自他の健康と命の大切さに気づき、病気とともに生きる人の気持ちに寄り添うことができるようにする。

時	第1時～第6時	第7時
指導計画 ◆がんに関する学習内容	第1時 病気の起こり方 ◆病気の原因	体育：保健領域 ◆がんの現状、生活習慣との関連性、自分たちでできる予防の方法 【本時の目標】 ○がんについて正しく理解することができるようにする。 (知識・理解) ○学んだ知識を活用して、がんになりにくい生活とは何かを主体的に考えることができるようにする。 (思考・判断) 【授業展開】 1 がんの現状を知り、がんについて学ぶ必要性に気付く。 2 本時の目標を確認する。 がんを予防する方法を考えよう 3 がんの仕組みについて理解する。 ・人間の体は細胞でできており、毎日同じ遺伝子を持った細胞をコピーして体を維持している。 ・細胞のコピーの中でコピーミスが起きるが、少しならば体の抵抗力が消してくれている。 ・体の抵抗力が下がっていたり、何かの原因でコピーミスがたくさん増えてしまったりすることが、がんの原因になる。 ・医療進歩により生活の質を変えずに治療を継続する人もいる。 ・生活習慣を整えれば、がんにかかるリスクが下がる。 4 前時後半の活動を生かし、がんを予防するための生活習慣について自分の考えをもち、おすすめのキーワードを決める。 5 自分の考えを同じグループの人に説明する。 6 グループで出たキーワードから、他のグループに紹介したいキーワードを決める。 7 全体でグループごとに発表する。質疑応答もする。 8 たくさんのキーワードや考えを知った上で、改めて自分の生活の中で大切だと思うキーワードを決める。 9 数名が発表し、全体で共有する。 10 本時の学習を振り返る。
	第2時 病原体と病気 ◆病気の予防 抵抗力	
	第3時 生活の仕方と病気1 ◆栄養バランス、生活習慣病の予防	
	第4時 生活の仕方と病気2 ◆生活習慣病の起こり方とその予防	
	第5時 喫煙の害 ◆喫煙とがんの関係	
	第6時 前半：飲酒の害 ◆飲酒とがんの関係 後半：がんの予防 ◆がんの予防方法について自分の考えをもつ	

主体的・対話的で深い学びをしている児童の姿 (第7時)	対・大切なキーワードを選択した理由をグループの全員へ伝えようとしている。 ・互いの思いや考えを納得するまで伝え合い、分かり合おうとしている。 ・他者と自分との考えの違いに気づき、その理由を知ろうとしている。 ・他者の考えに対し、新たな疑問に気づき相手に伝えようとしている。 【写真の説明】4～5人のグループ内での話し合いの後、各グループからの発表を聞き、一人一人が更に自分と他者との考えを比較し、共通点や相違点を見付けている。
	 がんの予防にはどれもおすすめだな。 たばこを吸わないのも大切だけど、ストレスがなければたばこを吸わないかもしれない。
指導の工夫 (第7時)	対・話し合いのルール（相手が納得する根拠を言う、聞き手は疑問点を伝える等）を示し、対話の中で既習事項を活用させる。 ・自信をもって自分の意見を表現できるよう事前に考えをまとめさせる。

第 8 時	第 9 時～第 10 時	他教科等	時
特別活動：学校行事	体育：保健領域	道徳	指導計画
◆自分や大切な人の健康や命について考える 【本時の目標】 ○がん経験者の手記を通して健康と命の大切さについて考え、自他の心身の健康をより高める生活を実践しようとする態度を養う。 (自主的・実践的に活動する力) 【授業展開】 1 前時の振り返りを行う。 2 本時の目標を確認する。 がんを通して健康と命について考えよう 3 前時の「がん予防のキーワード」を整理する。 4 「がんを防ぐための新 12 か条」を知る。 5 がん経験者の手記の範読を聞く。 6 感想を数名発表し、全体で共有する。 7 もしも、自分が手記を書いたがん経験者の家族だったらどんな気持ちになるかを想像する。 8 近くの人と意見交換をした後、全体で発表する。 9 自分や大切な人の健康や命を守るためにできることを考え、ワークシートに記入する。 ①自分の健康や命を守るために今日からできること。 ②大切な人の健康や命を守るためにできること。 10 考えた内容についてグループで意見交換する。 ・他にも方法はないか、考えた内容を更によくするためにはどうしたらよいかを話し合う。 11 全体でグループごとに発表する。 12 がん経験者の退院後の生活を知る。 13 本時の感想をワークシートに記入する。 14 数名発表し、全体で共有する。 15 がん教育のリーフレットを配布する。	第 9 時 薬物乱用の害 ◆薬の効果、副作用 薬物を乱用した時の害（がんとの関係） 第 10 時 地域の様々な保健活動 ◆健康診断、がんの治療やケアについて	生命尊重（がん患者の体験談） ◆健康や命の大切さについて考える	「総合的な学習の時間」、「特別活動（児童会活動）」等 ◆がんに関する学習内容 ◆基本的な生活習慣

主体的・対話的で深い学びをしている児童の姿 (第 8 時)	主 がんを自分や身近な人の生活に関係のある病気として考えている。 対 班での話合いや発表の中で、自分の考えを見直したり、広げたり、より深めたり、他者の考えを取り入れようとしている。 深 ・がんの予防について体育の既習事項と関連付けて考えている。 ・体育の既習事項と自分の生活とを関連付け、より望ましい生活習慣に向けた取組について考えている。 【写真の説明】各グループでの話合いの際に教師が机間指導をし、児童と教師との対話をしている。新たな視点の投げ掛けや児童の思いを言葉に表現することをねらっている。  休日に家族と一緒に外出すれば、運動にもなるし、ストレス解消にもなってよいのではないかな。 食事のとき、塩分や糖分の摂り過ぎに気を付けたり、好き嫌いせずに食べたりすることが大切だね。
指導の工夫 (第 8 時)	主 がん経験者の手記を扱うことで、がんになったときの様子をより具体的にイメージできるようにするとともに、がんを自分や身近な人の生活に関係のある病気として捉えられるようにする。 対 話合いを始める前の指示や机間指導で、更に話合いが深まるような問い掛けをする。（例：「考えた内容を更によくするためにはどうしたらよいか」等） 深 既習事項に着目させ、がんの予防と体育の既習事項を関連付けさせる。

○板書の例（小学校 体育：保健領域 第7時）

めあて：**がんを予防する方法を考えよう**

罹患率のグラフから児童が予想する病名
がん、心臓病、インフルエンザ、H I V

がん罹患率のグラフ がん罹患率と死亡率のグラフ

がん発生のメカニズム
人間は細胞の集まり 異常な細胞の発生 異常な細胞が増える

がんを防ぐためのキーワード
食事 運動 ストレスをためない
たばこをすわない 飲酒 抵抗力を上げる

各グループから発表されたプリント

1 グループ	2 グループ	3 グループ
4 グループ	5 グループ	6 グループ

○板書の例（小学校 特別活動：学校行事 第8時）

めあて：**がんを通して健康や命について考えよう**

- 手記を読んで
 - ・かわいそう
 - ・大変
 - ・がんになりたくない
- 自分の家族だったら
 - ・ショック
- 自分や身近な人の健康や命を守るために、
どんなことができるでしょうか
 - 【自分】
 - バランスのよい食事
 - 運動不足を解消する
 - ・週末に公園へ出かけて運動する
 - ・スポーツをする
 - 休養
 - ・よく寝る
 - たばこの煙をさける
 - 【身近な人】
 - バランスのよい食事
 - 運動不足を解消する
 - ・一緒に散歩をする
 - 休養
 - ・手伝いをする
 - たばこを吸わないように言う
 - 12 か条を教える
- 今日の授業で感じたこと、考えたこと
 - ・がんの予防をしようと思った
 - ・12 か条を教えてあげたいと思った
 - ・がんになったら大変
 - ・命を大切にしたい
 - ・生活習慣に気を付けたい

○ワークシートの例

（小学校 体育：保健領域 第7時）

ワークシート 6年生「病気の予防」6年 組氏名 _____

がんって、いったいどんな病気なの？

細胞のコピーミスが起こる どんどん増えて、ていこう方では消せなくなる

がんが大きくなると正常な細胞がうまく働けなくなるんだね

私は、がんの予防の中で、
キーワード 自分で決めたもの

自分の考え 理由 が、より大切だと感じます。 理由

みんなの発表を聞いて改めて自分に大切だと思ったことや感想を書きましょう

（小学校 特別活動：学校行事 第8時）

「がん」を通して考えよう

____年 ____組 名前 _____

1. 以下のことについて考えてみましょう。

① 自分の健康や命を守るために今日からできること
※例：（自分の生活をふり返って）～が…だから、〇〇したい。など

・自分の考えで変わったところや深まったところ

② 大切な人の健康や命を守るためにできること
※例：（その人の生活の様子を思い浮かべて）～が…だから、〇〇してあげたい。など

・自分の考えで変わったところや深まったところ

2. 今日の授業で感じたこと・考えたことを書きましょう。

【目標】・食事の適切な動作を意識することができる。

・元気に過ごせる食事を知るとともにその大切さを意識することができる。

時	第1時	第2時	第3時
		生活単元学習	
指導計画 ◆がんに関する学習内容	食事中の適切な動作を知ろう ・正しい姿勢で食べる。 ・適切な一口量で食べる。 ・よくかんで食べる。 (技能)	◆元気に過ごせる食事を知ろう 【本時の目標】 ○食事と健康との関連について学ぶ。(知識・理解) ○給食を通して栄養バランスのよい食事を知る。(知識・理解) 【授業展開】 1 始まりの挨拶をする。 2 学習内容の確認をする。 げんきにすごせるしょくじをしよう 3 前時の授業の振り返りを行う。 4 食べたい食事を選ぶ。 「前にある食べ物(写真)から食べたい物を選んでみましょう。」 5 食事と健康との関連について知る。 「好きな物や食べたい物を毎日ずっと食べていると、どうなってしまうか、考えてみましょう。」 ＜すぐに出る影響＞ ・体重が増える、運動をするのが大変になるなど ＜将来なる可能性のある影響＞ ・心臓や脳の病気、「がん」という病気になるなど 6 元気に過ごせる食事を知る。 ・元気に過ごせる食事として給食の説明を聞く。 7 元気に過ごせる食事を選ぶ(クイズ)。 ・個別の課題に合った栄養バランスと食事の量に関する2択クイズ 8 クイズを振り返る。 9 授業の振り返りをする。 ・食事と健康との関連について学んだこと ・給食が栄養バランスのよい食事であること 10 次回の授業について知る。 11 終わりの挨拶をする。	◆元気に過ごせる食事を選ぼう ・栄養バランスのよい食事を考え、選ぶ。 (思考・判断・表現)

主体的・対話的で深い学びをしている児童の姿(第2時)	主 自らの食生活について振り返り、課題を発見し、解決策を考えようとする。 対 他者の考えを取り入れ、新たな改善策に気付いたり、考えたりしようとする。  【写真の説明】スライドで二つの食事のメニューを提示し、比較することで児童の気づきを促している。 T1:「元気に過ごせる食事かな。」 T2:「何が足りていませんか。」 児童:「野菜が少ない。」
指導の工夫(第2時)	主 児童の好きなメニューや給食の写真を視覚教材として取り入れることで、児童が興味・関心をもち、積極的に授業に取り組む姿を引き出す。 対 少人数での学習形態を生かし、教師からの発問を意図的に増やすことで、自分以外の児童が活動に取り組む姿を通して、他者の価値観や考え方に触れ、自分の考えを深められるようにする。

【目標】 がんという病気について理解することを通して、自他の健康と命の大切さに気づき、病気を予防することや、病気とともに生きる人の気持ちに寄り添うことができる。

主体的・対話的で深い学びをしている生徒の姿(第8時)	主 自らの課題を発見し、既習事項を生かして改善策を考える発言や記述がある。 対 話し合いのルールを守り、科学的な根拠を踏まえて意見を伝え合う姿がある。 深 学習した知識や他者の考えを生かし、自己の生活課題への改善策をより具体化した発言や記述がある。 【写真の説明】学級全体で二人組をつくり、対話をしたことで、相手の生活の課題を聞き取り、改善策を提案した。ペアワークを通して学んだことを発表している。
	運動不足や肥満・やせすぎもがんの原因になるなんて驚いたね。受験勉強を始めてから運動をする機会が少なくなったことが課題だね。  たくさんの時間はとれないから、普段の生活の中に体を動かすことを取り入れたらよいと思うよ。エレベーターを使わないで階段にするとか、塾まで歩くとか、いろいろできそうだね。
指導の工夫(第8時)	主 なぜがんについて学ぶのか考えさせたり、グラフやデータ、事前調査の結果を用いたりすることにより、身近な課題であることを認識させる。 対 話し合いのルール(相手の納得できる根拠を言う、聞き手は発表者に具体的に前向きなアドバイスを伝える、より具体的な生活の工夫を考える等)を示し、対話の中で既習事項を活用させる。 深 ペアの助言により、自己の課題解決策の内容が更に深まった生徒に全体場で発表させる。

第9時	第10時～第17時	他教科等	時
特別活動：学級活動	保健体育：保健分野	道徳	指導計画
◆がんの治療、がん患者の生活・思い 【本時の目標】 ○がん患者の生活や心理状態について理解できる。 (知識・理解) ○よい社会づくりのために自分ができることについて考えることができる。 (思考・判断・実践) 【授業展開】 1 今、家族や友人などの身近な人ががんになったらどんな気持ちになるかを想像する。 2 本時の目標を確認する。 がん患者さんの気持ちを理解し、よりよい社会にするために自分にできることについて考えよう 3 がんの治療法について知る。 ・手術、化学療法、放射線治療の3本柱 4 Aさん（同世代のがん患者）の手記を読む。 5 Aさんがどのような辛さや不安を感じているか考え、全体で確認する。 6 身近にAさんがいたらどのように関わればよいか考え、数名で話し合い、発表する。 7 Aさんが暮らしやすい社会について考え記述する。 8 ①（Aさんも含め）がん患者さんが暮らしやすい社会はどのような社会だと思うか、②そのような社会にするため自分たちはどのように行動すればよいか、の2点をグループで話し合い、画用紙にまとめる。 9 グループで出た意見を全体で発表する。 10 Aさんのその後の生活を紹介し、よりよい社会（正しい病気の理解、相手を尊重した関わり）について確認する。 11 がん教育のリーフレットを配布する。 12 本時の感想をワークシートに記入する。	第10時～第14時 薬物乱用と健康、感染症の予防 第15時 保健・医療機関の利用 ◆健康診断、健康相談、医療機関の受診 第16時 医薬品の有効利用 ◆薬の効果、副作用 第17時 共に生きる社会 ◆共に健康に生きる社会整備	生命尊重（がん患者の体験談） ◆健康や命の大切さについて考える	「総合的な学習の時間」、「特別活動（生徒会活動）」等 ◆基本的な生活習慣

主体的・対話的で深い学びをしている生徒の姿（第9時）	主 患者の様子や気持ちを具体的に想像した発言がある。 対 ペアやグループでの話し合いで、自分の考えを発表したり、他者の意見をよく聞き質問したりする姿がある。 深 がん患者が暮らしやすい社会をつくるために自分が今できることについて、既習事項や他者の考えを生かした発言や記述がある。 【写真の説明】各グループで話し合ったことを画用紙に書いて黒板に掲示し、生徒と教師との対話をしている。話し合いの視点を広げたり、深めたりすることをねらっている。  Aさんは特別扱いされることを望んでいないね。 Aさんが自分にできることは何なのか、本人の望みを聞くことが大切だね。でも、病気のことも心配だね。 がんの治療や副作用のことも、周囲が理解しておく必要があるね。どうやって知識を広めたらよいかね。
指導の工夫（第9時）	主 同世代の患者の手記を扱うことで、がん患者の生活や困難をより具体的に想像させる。 対 グループでの話し合いの役割（司会、記録、発表者）を事前に示し、より具体性のある意見交換をするよう促す。 深 話し合い時の机間指導で、更に話し合いが深まるような問い掛け（例：「本当に特別扱いは必要ないのか。」、「どうしたら皆が正しい知識をもてるのか。」など）をする。

保健編4 健康な生活と病気予防

**がんについて正しく理解し、
がんを予防するための望ましい生活習慣について考えよう。**

3年 組 番 氏名 _____

1 がんの予防法について考えよう

5つの生活習慣を実践することで、がんになる危険性が低くなります。5つの望ましい生活習慣とは何でしょうか？ヒントを参考に考えてみましょう。

5つの望ましい生活習慣	ヒント 穴埋めも考えてみましょう！ 新聞で大量だと知ったことは食生活に書きましょう。
① 「 」を 吸わない	<u>たばこ</u> の煙には多くの発がん性物質が含まれており、肺がん等の多くのがんにかかる危険性を高めます。
② 「 」を 飲まない	<u>お酒</u> を大量に飲むと、発がん物質が体内に取り込まれやすくなります。 アルコールを処理する肝臓などががんにかかる危険性を高めます。
③ 「 」を 食べ過ぎ	<u>塩分</u> の多い食べ物のとり過ぎは、胃がんにかかる危険性を高めます。 逆に <u>野菜</u> ・ <u>果物</u> の摂取は、がんにかかるリスクを低くする可能性があります。
④ 「 」を 動かす	<u>運動不足</u> は大腸がんや乳がんなどにかかる危険性を高めます。 適度な運動を取り入れることが大切です。
⑤ 「 」を 続ける	<u>喫煙・やけすぎ</u> は、がんの原因になる場合があります。

2 自分の生活を振り返ろう

がんを予防していくために、中学生の時からどのような生活を送ることが望ましいでしょうか。前時の学習で行った自分の生活を振り返り、自分の課題とその解決策を考えましょう。

① 一週間を振り返って見えた、「最も改善すべき自分の課題」とそれを「進んで進出」を記入しましょう

② 解決策（具体的な内容「いつ、どこで、どのように」など）を考えて記入しましょう。

友達からもらったアドバイスを記入しましょう。

(氏名) _____

3 まとめ

今日のがんの予防の授業を振り返って、大人になったときにがんを予防するために特に気を付けたいことを書きましょう。

がん患者さんの気持ちを理解し、
よりよい社会にするために自分にできることについて考えよう

3年 組 番 氏名 _____

A さんの手記（インタビュー記事から抜粋）

16歳の高校1年生の手記

・手術、抗がん剤治療の副作用

・退院後の生活の様子について

（学業、部活動、修学旅行等での
友人との関わりにおける苦悩）

1 がんの治療法について知ろう。

①	手術療法	がんを手術によって切除する。体への負担は大きいが、最近では内視鏡（小型カメラ）を用いた手術など、負担を軽減する手術方法も普及しつつある。
②	放射線療法	放射線を照射することによってがん細胞を死滅させ、がんを完治させたり症状を取り除いたりする。通院で行うことができ、体への負担も比較的少ない。
③	化学療法	抗がん剤などの薬を服用あるいは点滴・注射するなどして、がん細胞の増殖を抑える。薬の種類によっては、副作用として脱毛、吐き気などが現れる。

2 がん患者さんが暮らしやすい社会とは、どのような社会でしょうか。

① 自分の考え A さんが暮らしやすい社会とは、どのような社会でしょうか？

② 班の考え がん患者さんが、暮らしやすい社会とはどのような社会でしょうか？

3 2 で考えたような社会を実現するために、私たちはどのように行動すればよいでしょうか。班で話し合って考えてみましょう。

班の考え 今の自分たちにできることを考えよう。

4 今日学んだことを振り返って感想を書きましょう。

【目標】がんの特徴や治療法、予防策などを理解するとともに、がんをめぐる社会的な事や課題に気づき、誰もが支え合える社会の構築に向けて具体的な解決策を考える。

	関連する教科等（科目）	特別活動：ホームルーム活動 学年集会（10分）
指導計画 ◆がんに関する学習内容	<保健体育（保健）> 健康の保持増進と病気の予防 ◆健康活動と健康 ◆生活習慣病とライフスタイル ◆食事・喫煙・飲酒と健康 ◆青少年の喫煙・飲酒行動 ◆医薬品・薬物乱用と健康・薬物乱用防止	◆予防、早期発見・早期治療、誰もが暮らしやすい社会へ 【本時の目標】 ○がんという病気について理解できる。（知識・理解） ○がんの原因とその予防・がん検診の重要性について理解させる。（知識・理解） ○がんを取り巻く様々な事象と個人・社会の課題に気付かせる。（思考・判断） 【授業展開】 1 がんを取り巻く現状を知る。 2 本時の目標を確認する。 がんについて一緒に考えよう。 3 がんという病気を理解する。（3択クイズを交えて） 4 がんの原因を理解する。 ・6割は生活習慣、細菌・ウイルス感染、体質等が複合的に重なり合い発生すること、4割は原因不明であることを理解する。 ・小児がんは発生機序が異なり、原因不明であることを補足する。 5 がんの予防について考える。 ・望ましい生活習慣が、どの程度がんのリスクを減らせるかを伝え、予防だけで身を守るには限界があることを推測する。 6 がんの早期発見の重要性を深める。 ・がんの進行と自覚症状出現との時間差から早期発見には検診が不可欠であることを知る。 （クイズ・周囲と相談しながら考える。） 7 がんに関する個人・社会の課題を考える。 ・日本の検診受診率が極端に低いこと、世論調査より受診しない理由をスライドで示し、考えを深めるきっかけをつくる。 8 早期発見・早期治療をした95%の人が、がんを克服しているグラフを示す。 9 がんから身を守るための3要素を再確認する。 ・「予防」、「早期発見・早期治療」、「異変に気付いたら受診」 10 今後の学習に向けた方向性を示す。
	<理科（生物基礎）> ◆遺伝情報とタンパク質の合成： 転写・翻訳・遺伝子の発現 ◆生体防御： 自然免疫、獲得免疫等	
	<総合的な学習の時間> ◆支え合う社会	

主体的・対話的で深い学びをしている生徒の姿 指導の工夫	主 がんが身近な病気であることに気づき、保健指導に参加する姿が見られる。 対 周囲と共にクイズに取り組む姿勢が見られる。指導後に友人・家族と対話しようとしている姿や記述がある。 深 既習の知識と保健指導とを結び付けて考え、保健指導を今後の学びに生かそうとするような記述がある。	
	主 グラフ、数値、調査結果等から多角的にがんやがんに関連する課題に気付かせる。 対 クイズを導入する。他の科目・教科との関連に触れる。指導後に友人・家族との対話につながるような話題を意識した内容にする。 深 自らの予防、早期発見・早期治療の視点から、家族や社会問題へ視点を移し、今後の学習の中でも自ら考え、対話し、自分にできることは何かを問い続けるよう問題提起をして指導を終える。 ※この実践では、学年集会の中の一つのプログラムとして、10分間で320人の集団指導という形式で実施した。そのような学習形態においても、主体的・対話的で深い学びにつながるようにプレゼンテーションソフトを活用し、がん教育のリーフレットに沿った指導内容を展開した。	【写真の説明】広い会場でプレゼンテーションソフトを使いながら、320人の生徒への集団指導を実現している。 

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 「発達の段階に応じたがん教育の横断的・系統的モデル」に基づいたがん教育の推進

がん教育で育てたい児童・生徒像を実現するために、『がんの知識』は「体育・保健体育」または「生活単元学習」、『健康と命の大切さ』や『がん患者や家族の理解・共生社会の実現』は「特別活動」を中心に指導計画を設定した。また、『がんの知識』はより科学的・総合的な内容を取り入れ、『健康と命の大切さ』や『がん患者や家族の理解・共生社会の実現』は自らの健康だけでなく、共に生きる社会づくりについても考えさせる内容を取り入れることで、発達の段階に応じた指導内容を設定した。これらを一つの表にまとめた「発達の段階に応じたがん教育の横断的・系統的モデル」の作成により、現行学習指導要領と新学習指導要領に基づいたがん教育の教育課程上の位置付けを整理することができた。

学校の教育活動全体を通じて行うべきがん教育の実現に当たっては、今後、本研究で作成した「発達の段階に応じたがん教育の横断的・系統的モデル」を各校で活用し、児童・生徒の実態に合わせたがん教育の指導計画の作成、がん教育の推進が期待される。

(2) 児童・生徒の知識及び意識の変容

本研究において、保健教育を実施した学校で検証調査を実施できたことは、個々の児童・生徒の変容を読み取るだけでなく、がん教育の授業実践の効果を測る研究として成果が得られた。

検証調査の結果より、保健教育実践後、がんに関する知識の正答率は全体的に明らかに高まっていることが分かった。小学校、中学校では、がんと生活習慣との関連について知識の向上が見られ、更に日頃から健康的な生活に取り組もうと思うといった意識の向上も見られた。これらのことから、がんを身近な病気と捉え自分の生活習慣と結び付けることができたと考えられる。また、高等学校では、小学校、中学校と同様に知識・意識が向上したのに加えて、がん検診の受診や共生社会の実現に対する意識が向上していた。検証授業は10分間の学年集会という短い時間での指導だったが、この指導ががんについて興味・関心をもつきっかけをつくり、自らががん教育のリーフレット等を読むなど学習を深めていった結果、学習効果が上がったことが示唆された。さらに、小学校、中学校では、がんについて家族と話し合おうと思うという意識の向上が見られたことに着目すると、がん教育が家庭にも広がり、大人に対する働き掛けにもつながっていくことが考えられる。

(3) 主体的・対話的で深い学びの実現

本研究を進めるに当たっては、授業の中で児童・生徒にどのような姿が見られれば、主体的・対話的で深い学びとなるかを具体的に表しながら、以下のような指導の工夫を検討した。

小学校においては、体育科保健領域の学習で飲酒と喫煙までの学習を終えた後、話合いに向けた事前準備を行った上でがんに関する学習を行った。それにより、既習内容からがん予防についての自分の考えをまとめ、自信をもってグループで発表することができ、友達の意見と比較しながら課題を解決しようとする児童の姿が見られた。さらに、学校行事でのがん経験者の手記を読み、自分や大切な人の健康や命を守るためにできることを考える場面では、がんについて主体的に捉える手だてとして、自分の大切な人を具体的に想像してから学習活動を進めた。その結果、「身近な人の命を守るために自分ができることが多いことが分かつ

た。」など、がんを身近な健康課題として捉え、望ましい行動を実践していこうとする意欲につながることができた。

中学校においては、保健体育保健分野の学習で、知識を深めるためのワークシートを作成し、学習した知識を活用しながら、がん予防のための望ましい生活習慣について考えさせた。対話的な学びを促すための手だてとしてペア学習を取り入れたことで、具体的なアドバイスをしたり、友達からの意見を踏まえてよりよい解決策を見付けたりすることができた。さらに、「自分の課題解決策が具体的になったので、実行しようと思えました。」と学んだことを生活に生かそうとする記述を引き出すことができた。また、学級活動では検証授業を通して、がん患者の手記を同年代の患者のものに変更したことで、患者の気持ちが想像しやすくなり、がんを身近なものとして捉える発言につながった。

知的障害特別支援学校（小学部）においては、生活単元学習で栄養バランスのよい食事について学ばせることが、がんにかかるリスクを低くすることにつながると考え、実践を行った。児童の好きな食べ物や給食の写真を教材にしたことで、積極的に授業に取り組む様子が見られた。また、他の児童の発言に対して、アドバイスをするなど対話的な学びにつながった。その後の学習では、好きな食べ物ではなく、栄養バランスを考えて食事を選ぶようとする意欲が、児童の表情や発言、行動から見られ、本時が深い学びの実現につながっていたことが分かった。

高等学校の場合において、学校間によるカリキュラムの違いや生徒の学力差が大きいため、事前調査で生徒の理解度や既習事項を把握した上で指導内容を検討した。短時間の学年集会ではあったが、生徒の実態に即した内容を精査したことで、生徒が集中して学習に取り組むことができていた。反応も十分に見られ、事後調査の記述では、「がんになってからのことも知りたかった。」、「具体的な治療方法について自分で調べたい。」などの意見があった。

以上のように、がん教育に主体的・対話的で深い学びを引き出す指導の工夫を取り入れることで、がんを自分自身の健康課題として捉えさせ、多くの学び合いの場面を引き出すとともに、児童・生徒自身が学んだことを活用しようとする授業実践につなげることができた。

2 今後の課題

(1) がん教育の教育課程上の位置付け

先行研究等では、がん教育の教育課程上の位置付けが例示されている。しかし、本研究でがん教育を実施するに当たり、体育や保健体育の授業は担任や保健体育科の教諭との打ち合わせが必須であり、実現が難しい学校もあった。また、健康と命の大切さやがん患者とその家族の理解、共生社会の実現について考えさせる授業は、特別活動だけでなく道徳を含めたその他の教科で指導することも可能であると考えたため、横断的な指導の在り方に苦慮した。小学校、中学校ともにがん患者への理解を指導項目として挙げたが、検証調査の結果からは深めることができなかったことが明らかになっており、先に述べた横断的な指導の必要性が示唆される。新学習指導要領の中でも重要視されているカリキュラム・マネジメントの観点からも、今後は、がん教育についてその目的や意義を明確にし、教育課程に位置付け、学校の教育活動全体を通じて取り組んでいく必要があると考える。

(2) がん教育の推進

児童・生徒のがんに関する知識の定着や意識の向上、そしてがん教育が生涯に渡って健康的な生活を送るための基盤となるためにも、指導を受ける機会が増えること、指導内容が充実していくことが重要となってくる。現在、がん教育の機会が多いとは言えず、その計画的な実施については教職員の理解を十分に得ているとは言えない。また、内容の充実については、実践の積み重ねとともに、児童・生徒の興味・関心を高め、科学的根拠に基づいた専門的な内容を分かりやすく教えるために、外部講師等の活用も必要と考えられる。しかし、がん教育を専門的に指導できる外部講師の育成や人材確保については体制がまだ不十分であり、現場が対応しきれていないのが現状である。現在、東京都においてはがん教育推進協議会が設置され、がん教育の推進を目指している。学校は、都道府県や各自治体と連携しより充実したがん教育を実践していくことが必要であると考ええる。

【参考文献】

- 「小学校、中学校学習指導要領」（文部科学省 平成 20 年 3 月）
- 「高等学校、特別支援学校学習指導要領」（文部科学省 平成 21 年 3 月）
- 「小学校、中学校学習指導要領」（文部科学省 平成 29 年 3 月）
- 「特別支援学校（小学部、中学部）学習指導要領」（文部科学省 平成 29 年 4 月）
- 「小学校、中学校学習指導要領解説 総則編、体育編、保健体育編、特別活動編」
(文部科学省 平成 29 年 6・7 月)
- 「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」
(中央教育審議会・教育課程部会 平成 28 年 8 月)
- 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（中央教育審議会 平成 28 年 12 月）
- 「平成 28 年度がんの教育総合支援事業成果報告会」（文部科学省 平成 28 年 11 月）
- 「学校におけるがん教育の在り方について報告」
(がん教育の在り方に関する検討会 平成 27 年 3 月)
- 「がん対策推進基本計画」（厚生労働省 平成 29 年 10 月）
- 「がん教育推進のための教材」（文部科学省 平成 29 年 6 月一部改訂）
- 「がんについて正しく理解し、健康と命の大切さを考えるリーフレット」小学生用、中学生用、高等学校用（東京都教育委員会 平成 29 年 6 月）
- 「がん教育アンケート～青陵中学校（島根県江津市）最終報告書」
(公益財団法人 日本対がん協会 平成 27 年 1 月)
- 「平成 27 年度教育研究員研究報告書 学校保健」（東京都教育委員会 平成 28 年 3 月）
- 「平成 28 年度教育研究員研究報告書 学校保健」（東京都教育委員会 平成 29 年 3 月）

平成 29 年度 教育研究員名簿

小・中・高・特 合同・学校保健

学校名	職 名	氏 名
千代田区立昌平小学校	主任養護教諭	山田 美紀
目黒区立鷹番小学校	養 護 教 諭	坪 ひかり
世田谷区立船橋小学校	養 護 教 諭	小野 舞子
葛飾区立鎌倉小学校	主任養護教諭	○飯島 久美子
八王子市立館小学校	養 護 教 諭	田原 なつみ
調布市立緑ヶ丘小学校	主 幹 教 諭	山口 千砂
清瀬市立清瀬第七小学校	主任養護教諭	○須山 望
稲城市立稲城第三小学校	養 護 教 諭	馬 渕 章子
江戸川区立清新第一中学校	養 護 教 諭	中川 愛貴
多摩市立和田中学校	養 護 教 諭	宮 本 茜
多摩市立聖ヶ丘中学校	主任養護教諭	○高橋 美保
東京都立荒川工業高等学校	養 護 教 諭	武田 晶子
東京都立西高等学校	主任養護教諭	及川 奈緒子
東京都立山崎高等学校	主任養護教諭	◎小島 有美
東京都立水元特別支援学校	主任養護教諭	曾 根 涼子

◎ 世話人 ○ 副世話人

[担当] 東京都教職員研修センター研修部授業力向上課
指導主事 海老沼 寛之

平成 29 年度

教育研究員研究報告書

小・中・高・特 合同・学校保健

東京都教育委員会印刷物登録

平成 29 年度第 142 号

平成 30 年 3 月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 康印刷株式会社